
蜜柑禁止令

愛媛みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜜柑禁止令

【Nコード】

N8566G

【作者名】

愛媛みかん

【あらすじ】

「今日から、日本全国で蜜柑を禁止とする蜜柑禁止令が発令されました」そんな目を疑うニュースが流れたのはずいぶんと前である。人々はエイプリルフールのウソなのではないかと疑っていた。しかしそれはウソではなく本当であった。店頭から蜜柑は消え、蜜柑を含む商品は全て撤去された。その日、日本から蜜柑は消えたのだ。

#1 みかんの消えた日（前書き）

愛媛みかんという名前を利用しているため、みかんを題材とした無茶をした作品へ挑戦してみました。

プロットなど作っていないので色々は無茶をしますが宜しくお願ひします。

#1 みかんの消えた日

「今日から、日本全国で蜜柑を禁止とする蜜柑禁止令が発令されました」

そんな目を疑うニュースが流れたのはずいぶん前である。人々はエイプリルフールのウソなのではないかと疑っていた。しかしそれはウソではなく本当であった。店頭から蜜柑は消え、蜜柑を含む商品は全て撤去された。

その日、日本から蜜柑は消えたのだ。

日本からみかんが禁止されて、もう何年になるだろうか。人々はみかんの味を忘れていた。なぜ日本で蜜柑が禁止されたのかというと、とある科学者が「みかんには多様に服用すると死に至る毒が含まれていることがある為、これを食べるのは厳禁とすべきだ」との研究結果を発表した為である。

しかし事実は少し違っている。最近の研究で蜜柑に含まれる特殊な成分が見つかり、それを服用し続けていると身体能力の劇的な向上が可能になるかもしれないと判明した。日本はそれを受け蜜柑を禁止した後、軍事転用すべく日本中の蜜柑を監視下に置き研究を始めた。

最初、嘘の情報で蜜柑禁止を知った人々だった。彼らはこのような禁止令を受けても普段と変わらぬ生活を送れると考えていた。しかし、実際に日常からみかんおよび、それに類するものが消えたとき。人々の生活は少しずつ異変が起こっていったのである。

まずは、みかん禁止の煽りを受けて他のフルーツの需要が高まっ

た為、フルーツ価格の高騰が起こってしまった。最初のうちは数円、数十円の値上がりで済んでいたがこれに目をつけた業者達はフルーツの値段を急激に上昇させた。この影響が直撃した日本ではフルーツはもはや高値の華となっていた。政府側も蜜柑禁止令を解くことはできないので現状のフルーツ価格について口を出すことができずにいた。

しかし、もつと大きな問題を日本は抱えていた。コタツからみかんが消えたのである。これは致命的な痛手である。ネタを乗せていないお寿司のように、それは寂しさ、空しさをより一層増すだけであつた。

...

中央街道より外れた裏路地にあるスナック蜜柑という店。今では禁止こそされているものの、以前の日本では庶民の味とされていたみかんである。その名前を利用し庶民らしさを感じさせることを目的としていた酒場の名前なのであるが、今では皮肉なことに高級さ、怪しさのみを感じる名前となってしまうている。

その中に二人の男がいた。ボサボサの髪を乱暴にかきながらテールブルの酒・・・いや、オレンジジュースを美味しそうに飲み干すこの男。彼はみかんを取り戻すべく日本各地で活動を行っている蜜柑解放隊の一員である。名をシンイチと言う。

「どうだ？」

その男に声をかけるもう一人の男。彼も蜜柑解放隊のメンバーである。彼は先日情報屋が入手してきた蜜柑貯蔵庫という場所を調べ、蜜柑を奪還すべく活動していたのであつた。しかし彼の顔を見るに

その作戦は成功とは言えなかったのである。

「残念ながら……、蜜柑は見つからなかった」

奪還に失敗した男は悲しそうにオレンジジュースを飲もうと手を伸ばす。しかし、オレンジジュースはもう残っていないかった。彼らのアジトであるスナック蜜柑からも蜜柑は確実に失われているのである。蜜柑解放隊の彼らが蜜柑を手に入れられなくなるのも時間の問題なのかもしれない。

「諦めてはダメよ。二人とも」

ふと、店内の奥から美しいドレスをまとった女性が一人出てきた。見るところ30代前半といったところであろうか。いや、しかし。そんな年齢を感じさせぬほどの美しさは世界の男を魅了するほどのものといっても過言ではないであろう。

彼女は棚の奥から一本のボトルを出すと彼らの前に差し出した。そのボトルのラベルには「合成蜜柑ジュース」と書かれていた。

「ユウキ、ふざけるな。合成蜜柑なんか俺らが飲めると思っているのかっ！ こんな偽物の蜜柑にだまされている日本人はいつたいどうなっているんだ！」

一人の男が声を荒げる。そうこの合成蜜柑というのは日本が独自に開発した蜜柑の成分を一切使わず、蜜柑風の味を再現した「偽物」の蜜柑もどきなのである。日本は蜜柑禁止令による日本人の蜜柑欲を満たそうとしているのである。

「ふふ、外装にだまされているようではまだまだだね、シンイチ」

ユウキは頭を手で覆うようにし、少し笑いながら話した。

「リク、中身を飲んでみなさい」

あっけに取られるシンイチを尻目に、隣の男、リクと呼ばれた男が封を開けてグラスに中身を注ぎ込む。辺りにはほんのりと柑橘系の甘酸っぱい香りが広がった。思わず男達の喉も鳴る。美味そうだと言わんばかりに。

リクはグラスを持ち上げ、一気に口へとその液体を流し込んだ。

一瞬の静寂

「本物の蜜柑だな……どこで手に入れたんだ？」

リクは我を忘れたかのような顔をし、思わずため息すら漏らしてしまった。あつという間にリクは美味そうに飲み干してしまった。釣られてシンイチも怪しげなその液体を飲もうと手を出す。しかし、まだ踏ん切りがつかないのかリクとユウキを見つめている。リクはため息を漏らしつつグラスをシンイチに進める。

シンイチは意を決したようにそのグラスの中身を飲んだ。あつという間にそれは飲み干された。

「う……うめえ……」

シンイチは息を漏らすと同時にソファアへと倒れこんだ。久しぶりに口にした本物とも呼べる別格に感じる程の蜜柑の味はそれほどまでにシンイチを興奮させた。と同時にあまりもの興奮にシンイチは軽い立ちくらみさえ覚えるほどであったのだ。

「蜜柑はまだ……失われていないのよ？」

ユウキは不敵な笑みを見せた。リクとシンイチの心臓は高鳴った。蜜柑を得られるという紛れも無い証拠を目の前に行っているのだ。どうすれば手に入るのか、それだけが問題であった……。

#1 みかんの消えた日（後書き）

本物の蜜柑の在り処がどこなのか。

そして彼らは蜜柑を手に入れられるのか。

日本の未来と蜜柑の未来は彼らに託された・・・のか？

#2 奪われたもの

「蜜柑はどこにあるんだ？ 教えてくれユウキ」

シンイチは声を少し張り上げてユウキに詰め寄った。スナツク蜜柑の中にシンイチの音が響き渡る。ユウキはシンイチの迫力を見てもまったく動じず、それどころかそれをかき消すかのごとく振舞った。

「落ち着きなさい、シンイチ。興奮しすぎよ」

ユウキの落ち着いた声で目を覚ましたかのようにシンイチは黙り込む。リクは黙ってこの出来事を見つめているだけである。しかし、リクもいつまでも黙って入れられない。蜜柑が手に入るといふのならそこへ行き、蜜柑を手に入れ人々に蜜柑を解放するという使命を果たさねばならないと、リクは考えていた。

「確かに興奮しすぎだシンイチ。しかしユウキよ。僕も黙ってはいられない、本当に蜜柑があるというのなら僕も知りたいところだ。この間、嘘の情報を掴まされて参っているんだ」

リクの言う嘘の情報とは、先日情報屋から入った蜜柑貯蔵庫の事である。確かに貯蔵庫らしきものは見つかったのだが中には何も無かった。しかもリクを見つけた警官による執拗な追跡によりリクはしばらく身を隠さなければいけなくなっていた。

「日本の連中は本当に蜜柑の持つチカラとやらの魅了されているのね、そんなものはありはしないというのに……」。ここから少し離れた所に私たちと同じく蜜柑を奪還しようとしているグルー

プがいるらしいの。彼らは少しの蜜柑を保管しているみたいなの。彼らに聞けば蜜柑の在り処を知ることができると思うわ」

ユウキの言っている事は間違いではなかった。確かにここから少し離れた所に蜜柑解放隊まではいかないが、蜜柑を保持し日本政府に反して戦っているグループがいるという噂があった。

蜜柑解放隊は現在はずか三人しか残っていないため、接触を避けてきていたが有力な情報が得られなくなって今、彼らの元を尋ね、そして聞いて見る必要があるのだろう。

「蜜柑を持つ物か……、持たざる俺たちに何か与えてくれるのかね」

シンイチは気だるそうに呟いた。今では貴重品所か、石油や宝石よりも価値を持つかもしれない蜜柑だ。そんなものが手に入る場所を簡単に教えてくれるだろうか。いや、それよりも蜜柑解放隊というものを受け入れてくれるのだろうか。悩みは絶えない。

「蜜柑に魅了された者達だけではないことを祈るばかりね、蜜柑を持つだけではダメ、蜜柑に心をコントロールされず、蜜柑をコントロールできる側に回らなければ」

ユウキはそう言うと奥の部屋へと戻って行ってしまった。ユウキの言う魅了された者達というのは恐ろしい程の価値がついたものを持ったが為に、自分が強くなったり、自身の権力が向上したかのよう錯覚してしまう者のことである。

蜜柑解放隊が、蜜柑の自由化を訴え再度蜜柑の流通を再開させようとしているのに対し、そういった蜜柑独占派は蜜柑を奪えさえばいい。奪う為に血をいくらでも流してやるうという考えを持つ

ている。

その為、シンイチの心配事は他人事ではなかった。蜜柑解放隊を受け入れてくれるようならば良いが、もしかしたら逆に蜜柑を要求されるかもしれない。下手をすれば対立してしまうかもしれない。こちらの出方次第で日本の蜜柑の未来が左右してしまう。

「考えていてもしょうがない、僕たちは彼らに会うしかない。少なくとも今はそうするべきなのだろう」

リクは呟いた。シンイチも心にある不安感をどうにかかき消してその意見に同意せざる終えなかった。その不安感がどうしても拭えぬことにシンイチは少しだけ違和感を覚えつつも。

シンイチとリクは明日にでも彼らの元を尋ねようと考えた。その為、明日になにが起こるか分からないために今日は早めであるが休息を取る事にした。ユウキが出してくれた蜜柑ジュースを互いに飲みつつ、スナック蜜柑で二人はしばしの休息を取るのであった。

「蜜柑に魅了された者達か……」
リクはそう呟くと、目を閉じた。

...

「蜜柑は日本の所有及び隠匿禁止食品に指定されています。ダメ、ミカン。貴方たちの幸せな未来のため蜜柑の不当所持および蜜柑の隠匿は認められません。これに違反した場合は強制的に処置を行う場合があります」

蜜柑禁止令が発令されてから、毎日のように流れるプロパガンダ放送である。日本は蜜柑禁止令として以下の命令を国民へと示した。

- 一・ 蜜柑を所持するべからず
- 二・ 蜜柑を隠すべからず
- 三・ 蜜柑を奪うべからず
- 四・ 以上に違反した場合は、適切な処置を受けるものとする

この禁止令が発令されてから、蜜柑を持つ者は軍への無償提供を強制された。断れば国家反逆罪として罪に問われ、禁止令に違反した者は禁止令違反として強制処置を受けることになった。

蜜柑暗黒の時代である。

しかし、これに反発するグループがいた。これが後の「蜜柑解放隊」へと繋がるのだが最初はもっと大規模なグループだった。

「国民の為の、国民による、国民の視点をもった蜜柑の自由を目指して」

とのスローガンを掲げ、正義の名の下に蜜柑を奪還し、蜜柑の自由化を目指して戦ったのである。

しかし、軍の対応は素早くそして残虐だった。振り返るのもおぞましいのだがある事件は蜜柑解放隊に衝撃を与えたのであった。

それは丁度一年前のことである。

一年前、東京

「お兄ちゃん……、蜜柑たべたいよお……」

一人の少女は体中に汗をかきながら、苦しそうに、うわごとのよ

うに呟いていた。

蜜柑禁止令が発令されてからまもなくして、蜜柑に禁止令を出す日本に不信感を持ち、蜜柑に想像を超える程のパワーが秘められているのではないかという噂が広まった。癌が治る、視力が戻る、心臓が再び動き出す。様々な噂はだんだんと尾ひれがつき日本中へと広まっていた。

その噂を信じていた少女。彼女を蝕むのは悪性のインフルエンザ。特殊な変異をしており特効薬が無い。また彼女の生命力を糧に成長・増殖を続けるウイルスである。感染力はないのだが、治療法が無い。ため。彼女は死を待つしかないという運命を背負っていた。しかし、蜜柑の奇跡のチカラを信じていた彼女は蜜柑を欲した。

その少女の兄。その名はリク。蜜柑解放隊の生き残りの一人である。しかしこの頃はまだ解放隊には所属していない、ただの国民の一人であった。

彼も最初の頃は蜜柑のチカラに魅了され、それが唯一の妹を治療する方法だと考えていた。

リクは必死に蜜柑を探した。死ぬ気で調べた。多額の金を払って手に入れようとした。

そしてある日。蜜柑解放隊が軍の蜜柑を奪い国民へと配るという情報を手に入れた。彼は妹を連れてその場所へと向かった。

「蜜柑を……ミカンをくれ！ 妹を妹を助けたいんだ！」
まだ少し若さの残るリク。妹を背負いながら必死に解放隊の一人へと説得を続ける。

しかし、蜜柑は公平に配るということであったためリクの

ために蜜柑を配るわけにはいかなかったのだ。周りの人間はリクとその妹を可哀想にとは思ったのだろうが、誰一人蜜柑を譲ろうとはしなかった。それほど人々の蜜柑に対する欲求は高まっていたのだ。

「なぜなんだ！ 妹が死にかけてるのに！ そんなにも蜜柑が欲しいのか！ 狂ってるぞ！」

リクは妹を抱きかかえながら叫んだ。辺りの人間は負い目を感じながらも蜜柑を大事そうに抱え、足早にその場を立ち去る者ばかりだった。

・・・しかし、そんな時 ふと蜜柑を手渡してくれた人がいた。全身黒いコートに身を包み怪しげな雰囲気をかもし出している男であった。がしかし、リクにとっては彼はまるで天使のように思えた。これで妹が助かる、これで救われると。

リクは震える手で蜜柑を剥いた。

そして、弱っている妹の口下へと蜜柑を運んでやった。妹は「蜜柑なの？ 嬉しいな。お兄ちゃんありがとう」と今にも消えそうな声で呟いた。そして一生懸命口をあけて蜜柑を食べた。

リクは安堵した。これで元通りだと。

しかし、そんな生易しいストーリーは用意されていなかった。

不意に妹の体が痙攣を起こしたのだ。リクは不意に起きたこの出来事に呆然とした。そして妹の痙攣を抑えようと必死になった。しかし、妹の口からは泡が吹き出し、目は白目をむいていた。やがて口からは大量の血が溢れ出してきた。これは病の症状ではないことは明らかだった。

蜜柑に毒が盛られていたんだ。

最後に望んでいた蜜柑を食べ、リクの妹は息を引き取った。苦しんで死んだと思われるのに、なぜか顔は満足げだった。蜜柑を食べれたからだろうか。

いくら蜜柑を独占し、守るためとはいえ
毒を盛り、国民に対して行動を起こした日本をリクは許せなかった。

リクは蜜柑解放隊へと参加することを決めたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8566g/>

蜜柑禁止令

2010年10月28日04時51分発行